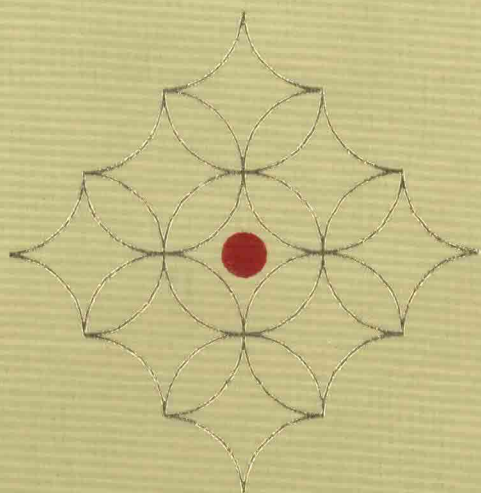




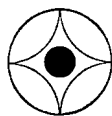
現代日本文學大系

22

幸徳秋水大杉榮
堺 枯川荒畑寒村集
田岡嶺雲河上肇



筑摩書房



現代日本文學大系 22

昭和四十七年二月五日
昭和四十九年一月三十日

初版第一刷発行
初版第二刷発行

幸徳秋水 大杉 榮
堺 枯川 荒畑寒村 集
田岡嶺雲 河上 肇

著者

徳秋水 大杉 榮

発行者

枯川 荒畑寒村
嶺雲 河上 肇
上 達 三

発行所

郡千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

(分類) 0395 (製品) 10022 (出版社) 4604

目次

隔扉物語

蝶くらべ

望郷台(抄)

よろづ文学(抄)

巻頭写真
筆蹟

幸徳秋水集

兆民先生

社会主義神髓

余が思想の変化

獄中から三弁護人宛の陳弁書

堺枯川集

当世品定

田岡嶺雲集

明治叛臣伝

悪魔的文明

大杉榮集

日本脱出記

本能と創造

查

亥

七

庚

二五

二六

二七

二八

三

三

四

四

五

民衆芸術の技巧

三三

荒畑寒村集

艦底

三七

冬

三三

夏

三六

寒村自伝(抄)

二五

河上肇集

自画像(抄)

二六

〔付録〕

幸徳秋水

飛鳥井雅道
二七

妻の見た堺利彦

堺 爲子 三三

『近代思想』と労働文学

瀬沼茂樹 三九

田岡嶺雲

家永三郎 四〇

大杉栄

高見 順 四四

荒畑寒村の『自殺未遂』

始末

堺 利彦 四〇

河上肇と求道の科学

大河内一男 四七

年譜

四四

著作目録

四六

辛德秋水集

重光樹色望悠：
中江生人相倚樓。
數盡古今不平事，
最無聊賴是離愁。

秋水

兆民先生

第一章 緒言

「寂寞北邙吞淚回、斜陽落木有余哀、音容明日尋何處、半是成煙半是灰」。想起去年我兆民先生の遺骸を城北落合の村に送りて茶毘に附するや、時正に初冬、一望曠野、風勁く草枯れ、满目慘凄として万感胸に湛へ、去らんと欲して去らず、悄然車に信せて還る。這一首の惡詩、即ち當時車上の口占に係る。嗚呼逝く者は如斯き歟、勿々茲に五閏月、落木蕭々の景は変じて緑陰杜鵑の天となる。今や能く幾人の復た兆民先生を記する者ぞ。

但だ予や年初めて十八、贅を先生の門に執る。今に追て十余年、其教養撫育の恩深く心肝に銘ず。而して未だ万一の報する有らず、早く死別の悲みに遭ふ、遺憾何ぞ限らん。平生事に触れ物に接して、毎に憶ふて先生の生前に至れば、其容其音、夢寐の間に髣髴として、今猶ほ昨日の如きを如何せんや。

況んや夫の高才を持し利器を抱て、而も遇ふ所ある能はず、半世輻輳の裡に老い、圧代の経綸を將て、其五尺軀と共に、一笑空しく灰塵に委して悔るざらしむる者、果して誰の咎ぞ哉。嗚呼這箇人間の欠陥、真に丈夫兒千古の恨みを牽くに足る。孔夫子曰へるあり、「從于彼曠野、我道非耶」と唯だ此一長嘆、実に彼が万斛の血涙を蔵して、凝り得て出来る者に非ずや、子豈に特に師弟の誼あるが為めにのみ泣かん哉。

而して先生今や即ち亡し。此夕独り先生病中の小照に對して坐す

る者多時、涙覚へず数行下る。既にして思ふ徒らに涕泣する、是れ兒女の爲のみ、先生我れに誨ゆるに文章を以てす、夫の意氣を導達する、其れ惟だ是れ乎、即ち秃筆を援て終宵寝ねず。描く所何物ぞ。伝記乎、伝記に非ず、評論乎、評論に非ず、弔辭乎、弔辭に非ず、惟だ予が曾て見たる所の先生のみ。予が今見つゝある所の先生のみ。予が無限の悲みのみ。予が無窮の恨みのみ。之を描きて豈に能く描き尽すと曰はんや。即ち兒女の泣に代へて聊か追慕の情を遣るのみ。思ふに天下有心の人あつて、能く個中の消息を解せらるるを得ん哉。

第二章 少壯時代

中江兆民先生は、弘化四年高知城下新町に生る。幼名は竹馬。長じて篤介と改む。兆民は号。別に青陵、秋水、南海仙漁、木強生等の号あり。考は卓介、妣は柳子。一弟あり、虎馬と云ふ、不幸短命にして逝けり。

先生年十三にして、卓介君卒す。家甚だ貧、而も母堂貞烈にして氣胆あり、紡織自ら給し、其二兒を訓誨する極めて嚴、人皆な其賢を稱せりと云ふ。予亦後年先生の家に在りて、親しく母堂の薰陶を受けるを得て、其真に先生の母たるに恥ぢざるの人なることを知れりき。

先生幼にして穎悟、夙に經史に通じ、詩文を善くせる者の如し。而して其性極めて溫順謹厚の人なりしは、頗る奇なるに似たり。母堂屢屢予等に語つて曰く、篤介少時、溫順謹厚にして女兒の如く、深く読書を好みて郷党の賞賛する所となりき。而して今や即ち酒を被つて放縱、至らざる無し。性情の變化する、何ぞ如此く甚しきや、此一事余の痛心に堪へざる所也。卿等年少慎で彼れに倣ふ勿れと。然れども先生の母堂に事へて至孝なる、其生涯を通じて渝らず、一事の命ぜらるる毎に、唯々として敢て或は違はざりき。

先生十七八歳始めて洋学に志し、萩原三圭先生、細川潤次郎先生に

就て和蘭の書を学び、慶応元年十九歳にして、高知藩留學生となり、長崎に遊び、平井義十郎先生に就て、始めて仏蘭西學を脩めたり。

當時長崎の地は、独り西欧文明の中心として、書生の留學する者多きのみならず、故坂本龍馬君等の組織する所の海援隊、亦運動の根柢を此地に置き、土佐藩士の來往極めて頻繁なりき。先生曾て坂本君の狀を述べて曰く、豪傑は自ら人をして崇拜の念を生ぜしむ、予は當時少年なりしも、彼を見て何となくエラキ人なりと信ぜるが故に、平生人に屈せざるの予も、彼が純然たる土佐訛りの方言もて、「中江のニイさん煙艸を買ふて来てオーセ」などと命ぜらるれば、快然として使ひせしこと屢となりき。彼の眼は細くして其額は梅毒の爲め拔上がり居たりきと。

奇なる哉、坂本龍馬君を崇拜したる當時の一少年は、他日實に第二の坂本君たらんとしたりき。坂本君が薩長二藩の連鎖となつて、幕府顛覆の氣運を促進し得たるが如く、自由改進黨の二党を打て一丸となし、以て藩閥を勦滅するは、是れ先生が畢生の事業とする所なりき。而して坂本君は成功せり、先生は失敗せり、成敗の懸る所、天耶、將た人耶。

居ること二歳、先生學大に進む、即ち去りて江戸に遊ぶの意あり。當時長崎より江戸に來往する外国飛脚船の船賃實に二十五兩を要す。即ち同藩の先輩岩崎弥太郎君に向つて志を言ふ。岩崎君依違して許さず、曰く少らく待てと。其迫ること屢なるに及んで、斷然之を排して曰く、二十五兩は巨額也、一書生の爲に授す可けんやと。先生亦佛然として曰く、如此くんば決して再び請はず、然れども僕の一身果して二十五兩を値ひせざるや否や、之を他日に見よと。袂を払ふて去れり。蓋し當時土佐藩留學生は岩崎君監督の下に在りし也。

時恰も故後藤家二郎君の、藩命を以て來り、汽船を購入するに會す。先生即ち往て謁し、一絶を賦して獻す。其前二句は今之を忘る、軋結は即ち云ふ、「此身合稱諸生否、終歲不登花月樓」。後藤君笑つて二十五兩を出して与ふ、先生大に喜び、直ちに外国船に搭じて江戸に

出づ。意氣奮揚想ふ可き也。此詩先生自ら書するもの、伊藤大八君現に之を藏せり。

故村上英俊先生は、日本に於ける仏蘭西學の泰斗と称せらる。當時塾を深川真田邸内に開く。先生即ち往て贅を執れり。然れども先生學術既に前輩に抜き、眼中人なく、氣を負ふて放縱驕す可らず。屢々深川の娼樓、所謂飯宅に留連し、遂に村上先生の破門する所となれり。村上先生の晩年病で落魄するや、先生旧時の師恩を思ひ、慰問怠らざりしと云ふ。

先生村上塾を去て、横浜天主堂の僧に從て学び、神戸大坂開港の時、仏國領事に從ふて大坂に遊ぶ。幾くもなく伏水の役あり、王政維新となるや、箕作麟祥先生江戸に出で、裏神保町に私塾を開くに會す。先生即ち又江戸に來り、箕作先生の門弟となる。其箕作塾に在るや、一時大學南校の助教たりしこと有り。後明治二年(?)福地源一郎先生湯島に日新社を設くるや、先生其塾頭となれり。

先生後ち語つて曰く、日新社の設くる、諸生來り學ぶ者多かりき。而も未だ一年ならざるに、福地先生は屢々吉原に遊んで歸らざるが故に、英學の生徒漸く散じ、唯だ予が率ゐる所の仏學の生徒を余せるのみなりき、彼は到底教育家にあらざりきと。而して先生も亦當時密かに近傍の稽古所にて、杵屋の三絃を学び居たりし也。

先生久しく外遊の志を抱き、故大久保利通公に謁して請ふ所あらんとす。閣下先生が蓬頭垢衣の寒瘡大なるを見て、拒んで容れず。先生乃ち日々衙門の前に遊びて、公の馬丁と親狎し、相圖つて其退庁に乘じ、車後に附攀して往く。公車を下るや、急に進んで刺を通じ、坐に延かるを得たり。先生乃ち政府の海外留學を命ずる、之を官立學校の生徒に限るの非なるを論じ、自ら其學術優等にして、内國に在て、就くべきの師なく読むべきの書なきを説きて、其選拔を乞ひ、且つ曰く、同じく是れ國民にして、同じく是れ國家の爲め也、何ぞ其出身の官と私とを問はんやと。公莞爾として曰く、足下土佐人也、何ぞ之を土佐出身の諸先輩に乞はざる。先生曰く、同郷の實縁情實を利するは、

予の潔しとせざる所也、是れ將に來つて閣下に求むる所以也と。公曰く、善し、近日後藤、板垣諸君に諮りて決す可しと。後藤、板垣二君亦爲めに斡旋する所あり、幾くもなく司法省出仕に任じ、仏蘭西留学を命ぜらる。時に明治四年、先生歳二十五。

先生が仏国留学中の事、親しく其詳細を叩くに違あらざりしは、今に於て予の深く遺憾とする所也。但だ予は、先生が、先づ小学校に入れるを聞けり。而して兒童の喧騒に堪へずして、幾くもなくして去り、里昂の某狀師に就て、學べるを聞けり。先生が司法省の派遣する所たりしに拘らず、専ら哲学、史学、文学を研鑽したることを聞けり。孟子、文章軌範、外史の諸書を仏訳したることを聞けり。其涉獵せる史籍の該博なりしことを聞けり。而して其婦朝や、当時我政府が一切の留學生を召還するの議ありて、先生も亦其中に在り、而して仏国の教師、先生の才を惜みて、資を給して止まらしめんと云ふや、先生意頗る動けるも、而も母堂の老いて門に倚るを想ふて、他年風樹の嘆あらん事を慮り、竟に帰途に就けるものなるを聞けり。予の知る所如此き耳。

然れども思へ、当時仏国の状勢たる、新に那勃翁三世敗虜の余を承け、内は朝野の党争鼎沸の如く、外は保守專制の反動澎湃として来る。而して彼のチエール、ガムベッタの諸英雄、毅然中流の砥柱を以て任じ、民主共和の大義の爲めに、一代の智勇弁力を揮ふて、激闘するの状を見る者、誰か血湧き肉躍らざることを得んや。先生の深く此の間に感得する所ありしや知る可き也。

先生が仏国に於ける交遊は、西園寺公望侯、故光妙寺三郎、故今村和郎、福田乾一、飯塚納の諸君なりしと云ふ。現に存するの諸君に就て當時の事を蔽かば、極めて興趣あり、且つ有益なるべきを信ずる也。先生、明治七年二十八歳にして歸朝し、元老院書記官となる。大井憲太郎、嶋田三郎、司馬遼之の諸君と俱なりき。而して元老院幹事故陸奥宗光君と善からずして罷め、次で外国語学校長となり、又幾くならずして罷む。先是先生自ら仏学塾を番町に起し、政治、法律、歴

史、哲学の書を講じ、四方の子弟來り學ぶ者、前後二千人に及ぶ。然れども先生は、竟に尋句摘草の儒生に甘んずる能はざりき。先生が少時より漢学の爲めに養はれたる治國平天下の志業は、其勃々たる野心を驅れり。其洋学の爲めに養はれたる自由平等の理想は其炎々たる熱血を煽れり。薩長藩閥が專制抑圧の暴威を逞しくするの時代に在て、先生は実に一個革命の鼓吹者たらざる能はざりき。

第三章 革命の鼓吹者

嗚呼巴里城中の平民、一たび竿を掲げて叫ぶや、歐洲列國の王侯宰相爲めに震惶せるは何ぞや。他なし、民権は至理なれば也、自由平等は大義なれば也。憐れむ可し、東洋の小帝國、曾て此至理の彩華を現するなく、曾て此大義の甘雨に浴するなし。齟齬々然として專制の頑夢未だ覚めず、蠢々乎として猶ほ蠻野の城中に在り。白居易の詩に云ふ、「鯨吞蛟閤波成血、鰲底小魚衆不知」と明治の初年泰西文明の新空氣を呼吸して帰る者、豈に此感なきを得んや。

先生の仏国に在るや、深く民主共和の主義を崇奉し、階級を忌むこと蛇蝎の如く、貴族を惡むこと仇讐の如く、誓つて之を剷除して以て斯民の權利を保全せんと期せるや論なし。且つ謂らく、凡そ民権は他人の爲めに賜ふせらるべき者に非ず、自ら進んで之を恢復すべきのみ。彼の王侯貴族の恩賜に出る者は、亦其剝奪せらるる有るを知らざる可らず。古今東西、一たび鮮血を濺がずして、能く眞個の民権を確保し得たる者ある乎。吾人は宜く自己の力を揮て、專制政府を顛覆し、正義自由なる制度を建設すべきのみと。

如此にして、先生は革命思想の鼓吹者となれり、「政理叢談」は発行せられたり、ルソーの「民約」は翻訳せられたり、仏学塾は民権論の源泉となれり、一種政治的俱樂部となれり、而して偵吏物色の焼点となれり。次で西園寺侯の東洋自由新聞起り、自由党起り、板垣君の自由新聞起るや、先生皆な之に与かり、熾んに自由平等の説を唱

へて專擅制度を拏撃したりき。

而して先生は、独り革命思想の鼓吹者たるのみならず、更に革命の策士、断行者たらんとし、或は九州の地に漫遊して、交を志士に結び、或は東洋学館を起して支那に為すあらんとし、運動怠らざりしものゝ如し。而して屢々困頓し、蹉跎し、満腔の不平遺るに所なく、竟に酒を被り世を罵つて、放縦度なきに至れり。

先生が其著三醉人経綸問答中に記する所の一節は、蓋し夫子自ら描き得て其真に逼る者。曰く、

南海先生酷だ酒を嗜み、又酷だ政事を論ずることを好む、而して其酒を飲むや、僅に一二小瓶を嚙す時は、醺然として酔ひ意氣飄揚として大虚に游飛するが如く目恰び耳娛み、絶て世界中憂苦なる者有るを知らず、更に飲むこと二三瓶なれば、心神頓に激昂し、思想類に空湧し、身は一斗室の中に在るも、眼は全世界を通觀し、瞬息の間を以て、千歳の前に溯り、千歳の後に跨り、世界の航路を指示し、社会の方針を講授して、自ら思ふ我は是れ人類処世の指南車なり、世の政事的の近眼者が、妄に羅針盤を執り其の船を導き、或は確に触れしめ、或は沙に膠せしめ、自ら禍し人に禍すること、実に憫れむ可きの至なりと、然れども先生身は斯世界に在るも、心は常に藐姑射の山に登り、無何有の郷に遊ぶが故に、其説く所の地誌、其述る所の歴史は、斯社会の地誌歴史と唯其名称を同くするのみにして、事實は往々齟齬することあり、但先生の地誌にも氣候寒冷の邦有り、温暖の邦有り、強大の国有り、弱小の国有り、文明の俗有り、野蛮の俗あり、其歴史にも治有り、乱有り、盛有り、衰有りて、極て斯世界の地誌歴史に切当することも間々之れ有り、更に飲むこと二三瓶なれば、耳熱し、目眩らみ、腕奮ひ、趾揚がり、発越飛騰して、其末や昏倒して前後を知らず、既にして二三時間睡眠し、酒醒め夢回へる時は、凡そ醉裡に言ひし事、又は為せし事は、一掃して痕迹を留ることなく、俗に所謂狐憑の落ちたるに似たり。

先生醉態実に如此く、世人見て以て一個の醉漢となせり。

然れども此醉漢や、猶ほ一面に於て、常に革命の鼓吹者たり、革命の策士たりき。而して当時其劃する所の隱謀秘策の如何は、予一々之を知る能はず、否な知れども語る能はざるを奈何せんや。唯だ先生が、或は某々有力者に遊説し、或は某々先輩に獻策して、多く用ゐられず、鬱々利器を嘆ぜしは予の明言し得る所也。

先生が平生如何に革命家たる資質を有せしかは、左の一話を以て知るべし。先生仏国より歸りて幾くもなく、著す所の策論一篇を袖にし、故勝海舟翁に依り、嶋津久光公に謁せんことを求む。海舟翁即ち海江田信義君を介して、冊子を公に獻せしむ。後数日公召す、先生拝伏して曰く、嚮日獻ずる所の鄙著清覽を賜へりや否や。公曰く、一閱を経たり。先生曰く、鄙見幸に採択せらるるを得ば幸甚也。公曰く、足下の論甚だ佳し、只だ之を實行するの難き耳と。先生乃ち進て曰く、何の難きことか之れ有らん、公宜し西郷を召して上京せしめ、近衛の軍を奪ふて直ちに太政官を囲ましめよ、事一挙に成らん、今や陸軍中乱を思ふ者多し、西郷にして来る、響の応ずるが如くならんと。公曰く、予召すと雖も隆盛命に依ぜざるを奈何。先生曰く、勝安房を遣して以て説かしめよ、西郷必ず諾せんと。公沈思之を久して曰く、更に熟慮すべしと。先生乃ち辭し還れりと云ふ。先生の過激の策を好む、概ね此類也。故に他年皆な先生を忌憚し、然らざれば則ち、徒らに奇矯の言を爲すとして排せられたりき。

先生壯時より海舟翁の知を得て、深く其人物に推服せり。常に予に語つて曰く、勝先生は当代の英雄也と。後年、大隈君の条約改正の談判に関し物論沸騰するや、後藤君密かに謂らく、勝伯は官中の信任厚し、或は御諮問の事なきを保せずと、即ち先生をして予じめ往て説く所あらしむ。翁、先生の面を一見するや否や、大笑して曰く「又条約の事で老人をイデマに來たのだナ」と。先生深く其慧眼に服せり。

先生又海舟翁の談に依て、西郷南洲翁の風采を想望し、欽仰措かず、深く其時を同じくせざるを恨みとせり。

先生會て吟じて曰く、「圯上受書知既久、沢中誰是斬蛇

人」と。先生の志を当世に抱くや、密かに子房を以て自況せり。曰く諸葛亮は天下古今第一品の人物、我企及すべき所に非ず。若し夫れ張良は、我之に任ずるを得ん、但だ我が爲めに漢高たる者なきを恨むのみ。若し西郷南洲翁をして在らしめば、想ふに我をして其材を伸ぶるを得せしめしならん、而して今や則ち亡しと。語此に到れば毎に感慨に堪へざる者の如くなりき。

嗚呼士の不遇、千古同歎。彼大沢斬蛇の英雄なく、自由党解体し、自由新聞廃刊し、仏學塾亦次で潰散し、明治の張良は、空しく陋巷に窮居し、多少の滄海公と共に、酒を飲で日を消するのみ。

然れども先生が多年撒布せる革命の種子は、決して萌芽を發せずして已まざりき。彼の明治十四年自由党創立の前後より、民権自由の思想は燎原の火の如く、政府は百万自由黨鎮圧に力め、朝野の紛争軋轢其極に達して、遂に明治十五年、河野広中等の福岡事件となり、同年赤井景韶等の高田事件となり、同十七年富松正安等の加波山事件となり、同年村松愛蔵等の名古屋事件となり、竟に十八年十月大井憲太郎等の大阪事件あるに至る。其他飯田事件の如き、静岡事件の如き、高崎事件の如き、多くの暴発を見るに至れるは、豈に先生の手中に運らすの一管、与かつて大に力ありしに非ざるを知らんや。

而して風雲は漸く急也、明治二十年井上馨の条約改正失敗するや、全国の志士、名を三大大事件の建白に托し、爆弾を抱て輦轂の下に集る者数百人、政府狼狽して、急に保安条例を發布し、疑似の者を捕へて東京三里以外に放つ。而して先生亦逐客となる、即ち母堂を奉じて函山の嶮を踰えて西す。時に十二月二十五日、朔風凜冽の夕なりき。先生歳四十一。

翌明治廿一年、先生、栗原亮一、寺田寛、故宮崎富要の諸君と東雲新聞を大阪に發行し、自ら之に主筆たり。当時東京を逐はるるの政客壯士、尽く此地に集り、政治上の言論、集会、出版皆な此地に於てし、関西日報には末広重恭、森本駿、大阪毎日には柴四郎、竹内正志、大阪公論には織田純一、西村時彦、経世評論には池辺吉太郎の諸君、皆

な侃諤の論を爲し、競ふて政府を攻撃し、一時其盛を極む。而して先生神韻の文、天馬の空を行くが如く、名声忽ち関西に籍甚たり。予が先生の門に入れるは実に此時に在り。

先生當時猶甚だ貧なりき、其新聞社より得る所、僅かに五十余金のみ。而して其會根崎の寓居は、僅かに四室にして、先生夫妻、令嬢、下婢の四人と、及び予等書生多きは四五人少きも三人常に玄関に群居せり。加之日夜訪客、堂に満ち、政客來り、商人來り、壯士來り、書生來り、飲む者、論ずる者、文を求むる者、錢を乞ふ者、援々として絶えざりき。母堂は令弟虎馬君の遺孤を携へて、近隣に別居せりき。

然れども此時や、先生の意気虎と文章と正に冲天の勢ありき。先生日に極大の筆を揮ふて時事を痛論せり、日に酣醉淋漓として卓落豪放の態を極めたり。其長髮鬚々として、頭に真紅の土耳其帽を戴き、身に東雲新聞の印半纏を着て出入せしも此時に在りき。壯士演劇を創して其顧問たりしも此時に在りき。而して隙駒匆匆々早くも憲法發布の時とはなれり。

明治二十二年春、憲法發布せらるる、全国の民歡呼沸くが如し。先生嘆じて曰く、吾人賜与せらるるの憲法果して如何の物乎、玉耶將た瓦耶、未だ其実を見るに及ばずして、先づ其名に酔ふ、我國民の愚に狂なる、何ぞ如此くなるやと。憲法の全文到達するに及んで、先生通読一遍唯だ苦笑する耳。

先生其著、三醉人経綸問答に於て諷して曰く、世の所謂民権なる者は自ら二種有り、英仏の民権は恢復的の民権なり、下より進みて之を取りし者なり、世又一種恩賜的の民権と稱す可き者有り、上より恵みて之を与ふる者なり、恢復的の民権は、下より進取するが故に、其分量の多寡は其の随意に定むる所なり、恩賜的の民権は、上より恵与するが故に、其分量の多寡は其の得て定むる所に非ざるなりと。然り先生は決して恩賜的民権を以て満足する者にあらざりし也。況んや其分量の極めて寡なる者をや。即ち慨然として曰く、咄々朝三暮四の計、黔首を愚にするの甚しきや。我党宜しく恩賜的民権を變じて、進取的

民権と成さざる可らず。

獨に保安条例に拘して退去の令を受くる者、憲法發布に際して皆な解除せられ、政治運動の中心又東京に移れり。時に後藤象二郎君大同団結を唱道して政界に横行す、疾風枯葉を払ふの概あり。而して其雄誌「政論」を日刊となすや、先生を聘して主筆たらしむ。先生乃ち家を挙げて東京に還る。予も亦従へり。

幾くもなく後藤君其友を売て入閣し、大同団結解体し、在野政党四分五裂の状あり。先生同志と共に自由党を再興し、自由新聞、立憲自由新聞等に主筆として専ら民党の糾合を図り縦横の策最も力む。而して議會開設に及んで、大阪より選まれて議員となる。

嗚呼議會開けて十年、其間議員候補たる者幾万人ぞ、而も一厘一銭の金を費すことなく、一挙手一投足の運動なくして、強て選挙民の爲めに推されて出る者、先生の如きは絶て見ざる所也。徳高きに非ずんば、曷んぞ能く如此きを得んや。

第四章 議員と商人

憲法布く、議會設く、人は参政の権を得たるを慶せり、世は新天地に入れるを賀せり。然れども此憲法や、先生の眼中に在て果して何物ぞや、此議會や先生の眼中に在て果して何物ぞや。

先生は所謂主義の人也、理想の人也。此主義果して行はれたる乎、此理想果して現ぜられたる乎、民権果して恢復せられたる乎、自由平等果して確保せられたる乎。思ふて此に至れば、猶ほ災風の日、身に葛衣の輕きを著けて、頭に鉄帽の重きを戴くの感なきを得んや。乃ち謂らく、議會劈頭第一の事業は、恩賜的民権を變じて、進取的民権と爲すに在らざる可らず、専制政府の顛覆に在らざる可らずと。

見よ、吾人は憲法に於て何の与へらるる所ぞ、議會は何の権能か有る。内閣は議會に対して何の責任なきに非ずや、上院は下院と同一の権能を有するに非ずや、内閣は常に政党以外に超然たるに非ずや、条

約の訂結は議會の与り知らざる所に非ずや、宣戰媾和は民人の与り知らざる所に非ずや、予算協賛の権は上院の爲に其半ばを奪はるるに非ずや。若し如此くんば我議會は独り民権伸張の具となすに足らざるのみならず、他日徒らに政府の奴隸たるに了らんのみ、内閣の爪牙たるに了らんのみ、墮落腐敗に了らんのみ。吾人は直に憲法の改正を請はざる可らず。

然り、吾人民人の代表者は、如此きの憲法の下に在ては、何事をも議し能はざるに非ずや、国家の利益と民人の幸福を増進すること能はざるに非ずや。衆議院議員は宜しく開會劈頭に於て、此意を具して、奏請する所ある可きのみと。是れ実に第一期議會前に於ける先生の大抱負なりき。

如此くにして、先生は其十年一剑を磨して計図せる所を以て、直ちに之を平和の中に遂行せんとしたりし也。彼は到底革命の鼓吹者たらざる能はざりき。

先生は乃ち此議を以て在野政友に切言して曰く、若し今にして決せずんば、他日噬臍の悔あらん、宜しく其基礎未だ固からざるに乗じて、之を擊破すべき耳、此膝一たび屈せば又伸ぶ可らず、機失ふこと勿れと。

然れども當時又一人の先生に聴く者なかりき。皆な曰く、何ぞ兆民の矯激俗を驚すの甚しきや。甚しきは即ち不臣不忠を以て先生を排する者あり、先生其爲すなきを見て、退いて、浩歎するのみ。

而して先生猶ほ意を政界に絶たず、日々握飯を竹皮に包みて、議院に出づ。而して予算八百万円削減の問題に関し政府在野党の衝突するや、以爲らく藩閥を殲す此の一挙に在りと。熱心各派の間を往来し、周旋大に力む。當時民党、吏党なる熟語は、先生が立憲自由新聞紙上に於て創作せし所也。

回顧すれば、民吏兩党の轡を駢べ、旗鼓堂々として相当るや、恰も東西兩軍の関ヶ原に闘ふが如く、真に一代の壯觀を呈したりき。而して民党の猪突鷲進して直ちに藩閥の壘に肉薄するの時に方つて忽然と

して金吾秀秋は現出せり。自由党の所謂土佐派なるもの款を敵に通じて、六百万円削減の交譲成り、九俣の功一實に欠きて、民党為めに潰走し、藩閥政府万歳を謳はんとは。

先生此時、恥為めに裂く。直ちに「無血虫」なる一文を叩して之を立憲自由新聞に掲げ、大に反覆者を罵倒し、次で辞表届を議長中島信行君に呈したり、其文に曰く、「アルコール中毒の爲め、評決の数に加はり兼ね候に付き、辞職仕候」と。議長懇ろに其在任を勧め、滯京の選挙人亦驚きて、馳せて其門を叩きて之を諫むるも、先生頑として聴かざりき。

先生議員を罷むる後、新井章吾等と経緯雜誌を起し、次で民権新聞を発行し、一面熾んに政府及び史党を攻撃し、一面自由、改進黨の聯合を主張し、以て全力を藩閥削減の事に致せり。先生曰く、維新の革命は実に薩長兩藩の聯合あつて、而して後始めて之を成すを得たり、今の自由、改進黨の兩派は猶ほ当年の兩藩の如し、真に第二維新の業を成さんと欲せば、兩派直ちに聯合せざる可らずと。

蓋し自由改進黨の兩党、甚だ其主義政見を異にするあらずと雖も、其歴史と感情との異なるが爲めに、其反目揆離大猿も啗ならざりき。而も第一期議會に歩調を齊しくしたる以来、双者の間淺々融和の傾きあり。先生即ち此機に乘じ、百万策を劃して、竟に大隈、板垣兩君をして一堂に会見せしむるを得たり。

多年異域の如くなりし兩君が、一朝相会して其旧交を温め、手を携へて政治の改革に努力するを誓へるの一事は、忽ち天下の人心を新にして、政府為めに震撼し、而して大隈君為めに枢密顧問の官を罷められたり。次で民党大懇親会なる者開かれ、民党の意氣大に昂る、皆な曰ふ、天下の事手に唾して成すべしと。実に明治二十四年十一月第二議會開会の前なりき。而して其結果や、即ち第二議會の解散となり、所謂二十五年の選挙干渉となれり。

此聯合や蓋し先生が、政治運動に於ける最初の成功にして、又最後の成功たらざる能はざりき、先生幾くもなくして、身を貨殖の業に投

じたれば也。

先生、仏學塾解散の後、只だ新聞雜誌に衣食す。毎月受くる所、五十金百金、多きも二百金に過ぎず、而して其執筆する所、皆な政黨の機關たるが故に、其資金甚だ乏しく、且つ極めて利殖に拙にして、朝に起りて夕に廢す。自由新聞や、立憲自由新聞や、民権新聞や、京都活眼新聞や、東雲新聞や、経緯雜誌や、比々皆な然らざるはなし。家益、貧にして逋債益々多し。廿五年、小樽の有志北門新聞を創し、先生を聘して主筆たらんと乞ふ。先生乃ち北海道に行き、居ること少時、遂に政界と文壇とを退き、家を札幌に賃して紙店を開き、次で北海道山林組なる看板を掲げ、貨殖に汲々たるに至れり。

先生當時予に語つて曰く、今の政海に立つて鉄面厚顔の藩閥と闘ふ、如何に筆舌を爛して論議するも、其功果極めて遅々たり。況んや今の政黨員、皆な貧困にして、加ふるに其運動の生産的消費を以てす、其窮極する所は、餓死に非ざれば自殺ならん、否らずんば即ち節を枉げ説を売りと櫛家富豪に頭使せらるの外なきに至らん。夫れ人尽く夷齊に非ず、能く節義の爲めに餓死を忍ぶが如きは、是れ庸衆に向つて期待す可らざるの事也。彼の某々の如き、豈に節義の何物たるを知らざらんや、而も暮夜櫛門を叩て臭名を流せる者、其心寧ろ憐れむべき也。方今の世阿堵なくして能く何事を為し得んや。

文学の如き亦然り。日々奔走に衣食する者、豈に不朽の文学を為し得んや。泰西の文人は世界を讀者とす。僅に二兩冊の傑作を出せば、忽ち数万部の需要あり、以て畢生糊口の資を得、悠々任意の文を作る。彼等皆な大抵恒産を有せざるなし。

支那の文人詩家、唯だ杜甫のみ真に困窮せり、彼七歌の如き、人をして酸鼻せしむ、然れども其他甚だ苦しめる者なし。彼の窮を憫ふること彼が如きの韓愈すらも、猶ほ妾を蓄ふるの余裕を有せしにあらずや、彼の饑を云ふ彼が如きの陶潛すらも、又婦来童僕の門に候して田園の耕耘すべきありしに非ずや。彼等金錢に驅られ、衣食を支へんが爲めに文を作らず、故に能く雄篇大作を出せる也。今や我小島國の限

りある読者に対して、其日暮しの生計を立つ、能く何事をか爲し得んや。

丈夫生れて天下の權を取り、以て其志を行ふ、真に快心の事、然らずんば即ち退いて水を飲み書を著さんのみ。而して今や兩つながら難し。嗚呼黃白なる哉と。

二十六年より、二十七八年に至る間、先生北海道より東京に、東京より大阪に、往復頻りにして、而して家益々貧に、衣服典し尽し、蔵書売り尽して、晏如たり。曾て笑つて曰く、大饑饉なる哉、朝暮唯だ豆腐の滓と野菜のみ、何ぞ惨なるや。汝等姑らく待て、予の陶朱翁たる近きに在り、予にして十余万金を得ば、新聞起すべし、政界に縦横すべし、汝を携へて欧米に遊ぶべし、而して大著作を爲すべしと。

而して先生の一たび牙籌を取るや、酒を廢し、行を慎み、殆ど別人の如し。後ち死に至るまで曾て一杯を口にせざりき。

二十六年の夏なりと記す。先生関西より還る。京都停車場に一貴人あり、多数の従者病を扶けて車に上る、近づきて之を見れば、故陸奥宗光君也。先生曰く、陸奥さんに非ずや、陸奥君曰く、中江君かと。

先生慨然として曰く、第一議會以後閣下を見ざる僅かに三年、何ぞ其衰へたるや、容貌殆ど現世の人に非ず、予は是れ閣下なるを思はざりきと。陸奥君曰く、足下は之に反して極めて肥満せるに非ずやと、深く其健康を羨むものの如し。先生、彼れの死期の遠からざるを見て同情の念に堪へず、懇ろに之を慰藉して談すること少時、陸奥君先生の酒を禁ぜることを聞き賞賛して已まず、自家の病漸く重きを嘆じ、頻に摂養の忽かせにす可らざるを説けりと云ふ。誰か知らん陸奥君を弔せるの先生、又十年ならずして他のために弔せらるるの人とならんとは。

此時先生語を転じて曰く、閣下、光妙寺を如何せんとするか、乞ふ速かに図る所あれと。故光妙寺三郎君晩年極めて落魄せるが爲め也。陸奥君曰く、彼れ甚だ政府部内の忌む所たるが故に、事頗る難し、而も早晚処するの途あるべし。先生曰く、彼は予の如く赤切符の生活に

堪る能はざる也、乞ふ速に之を圖れ。陸奥君曰く、足下は赤切符なりや。先生即ち下等切符を出して曰く、如此し、予は瀛車、汽船兩つながら中等以上の室に乗りしことなしと。兩人相見て大笑す。陸奥君の従者亦一齊に微笑して先生を諦視せり。先生は生平常に赤切符の生活に甘んじたりし也、彼れ奇を衒ふに非ず実に貧なりしが故也。

而して先生の事業は、日清戦役の後会社熱勃興の時に方り、毛武鉄道の株券騰貴の爲めに少しく利するありしのみ。其他河越鉄道と云ひ、常野鉄道と云ひ、京都パノラマと云ひ、遊廊設置と云ひ、中央清潔会社と云ひ、某々山林松下と云ひ、皆な損失に了らざるはなし、偶々其事業の成立したる者ありしも、其収益は先生の手に入らざりき。其「一年有半」中に、贏利は則ち他人之を取り、損失は則ち余之に任じ、其末や裁判、弁護士、執達吏、公売等統々生起し來りて後ち已むと言へる者、信也。

後年黒岩涙香君、万朝報紙上に「一年有半」を評するや、先生之を讀で予に寄するの書を作る。偶ま予の至るを見て半ばにして筆を投ぜり。其書に曰く、

黒岩氏の批評は、近来になく面白く相読み申候、推奨之処は敢て不当に論なきも、小生を操守ある理想家と看破し呉れたるは、茫々天下、唯涙香君一人、僕真に愉快を感じ申候、抑も僕の東洋策にも理想有り、經濟策にも理想有り、娼妓にも理想有り、營利業にも理想有り、即ち毛武鉄道の權利株が十余円したる節も、発起人だけは売らずに仮株券となる迄、持つ可きものと主張して、遂に自身のみならず、発起人一同へ損をさせたる坏、世人は定めて愚を笑はん、僕は左なくては株式会社は立ち行くべきものに非ずと考へ、今に考へ居れり、迂濶に迄理想を守ること、是小生が自慢の処に御座候、然に誰も此処を破破し呉れず、夫れ奇才の、夫れ学者のと、予何の人に出る才あらん、唯自慢する所は理想の一点のみ。

然り、先生は遂に其理想を棄る能はざるが爲めに敗れたりき。政治家として然り、文士として然り、実業者として殊に然り。而も紛々た

の今の実業者中、「左なくては株式会社は立ち行くべきものに非ず」の一句を讀で、愧死せざる者果して幾人か有る。

先生の會で群馬に娼妓を設けんとするや、予其先生の徳を累せんことを言ふ。先生即ち現下の社会に公娼の必要なる所以を論ずる、滔々数千言。且つ曰く、公娼既に必要たり、之を営む、何の不可あらん職業は一切平等也、何の貴賤か之有らん。予は既に商人たり、詐偽と盜賊を除くの外は、為さざるなけん。但だ彼の議員政治家の如きは、是れ公務也、一個營利の業に非ず。而も彼等が其職を利用して以て金錢を攫むが如きは、是れ直ちに詐偽盜賊のみ、是れ予の餓死すと雖も為さざる所也。予は今や議員政治家に非ずなり、一個の商人也、商人の金儲けは、予の主義理想に累するなし、汝安んぜよと。

先生は真に商人たらしとする者なりき。詐偽と盜賊を除くの外は、為さざるなきを希ひたりき。然れども思へ、今の商人中、幾何か詐偽と盜賊たらざる者有る乎。今の經濟社会に立つて、詐偽と盜賊を為さずして能く成功し得るの途ある乎。正実の商人を以て、投機師の社会に入るは、猶ほ馴羊を以て豺狼の群に投ずるが如し、宜なり、先生の連戦連敗せることや。

如此にして先生が実業家として十年の苦闘、贏す所は一の失敗のみ。宿昔青雲の志、空しく蹉跎して、鬢上忽ち斑々の霜に驚く、首を挙げて前途を望む、転た日暮れ途遠きを嘆ぜずんばあらず、慨然として殆ど倒行逆施に甘んぜんとするの意あり。

此時に方つてや、民間の政党全く当年の氣節なく、一に藩閥の驅使に供して官職利禄を求むるに汲々とし、腐敗日を逐て甚しく、第十議會、松隈内閣の買収政策を行ふに至りて、其醜を極めたり。次で伊藤内閣立つや、自由党又提携に托して其奴僕たらんとするの状あり。先生憤慨措く能はず、再び起て政界掃清の事に任ぜんとし、数名の同志を率ゐて、国民党を組織し、雜誌百零一を發行して、以て在野党聯合の急を説き、藩閥の討滅すべきを唱ふ。而も其金錢に乏しきが故に自由の運動を為すこと能はず、数月ならずして潰散せり。時に明治三十

一年なりき。

爾來先生貧益々甚し。明治卅三年秋、毎夕新聞の乞に應じて、其主筆となり、僅に米塩を支ふ。次で国民同盟会成るや、進んで之に投じ、奔走頗る力む。

先生の国民同盟会に入れるは、其志実に伊藤博文の率ゆる所の政友会を打破して、我政界の一大革新を成すに在りき。予當時聞ふて曰く、国民同盟会は蓋し露國を討伐するを目的となす者、所謂帝國主義の団体也。先生の之に与する、自由平等の大義に戻る所なき乎と。先生笑つて曰く、露國と戦はんを欲す、勝てば即ち大陸に雄張して、以て東洋の平和を支持すべし、敗るれば即ち朝野困迫して國民初めて其迷夢より醒む可し。能く此機に乗ぜば、以て藩閥を勦滅し内政を革新することを得ん、亦可ならずやと。

後予は屢々同会の為す有るに足らざるを言ふも、先生敢て聴かざりき。蓋し先生久しく髀肉の生ずるに堪へず、直情一往又成敗を論ずるに遠なかりし也。

越て数月、先生別に營利の事に關し、某々のために誘はれて大阪に赴き、病を得て卒に起たず。

第五章 文士

先生の一たび椽大の筆を揮ふて風雲を叱咤するの処、殆ど匹夫にして百世の師となり一言にして天下の法となるの概有り、文士としての先生は、真に明治の当代の第一人なりき。夫れ先生の才や天才也、其文や神品也、固に庸衆勉強の力の希ふ可きに非ずと雖も、而も別に其學術の素養根底の深き有るに非ずんば、曷んぞ能く如此くなるを得んや。

先生の幼にして經史を讀み詩文を善くせるは前に之を言へり。後ち仏蘭西の書を學ぶの間、常に漢學を修むるを休めず、作所の漢詩數百首ありき。其實作先生の塾に在るや、哲學の訳語を討査せんが

為めに仏典を講ずるの意有り、而して其健康の堪へざらんことを慮れ、一日突如石黒忠應翁を訪ふて診を乞ふ。翁一見して其蓬頭垢衣の状に驚き、其来意を聞きて深く之に感じ、大に奨励する所あり。先生喜び、麦酒三壺を贈り、診察料に代へて去れり。後數年ならずして中江篤介の名大に揚る、翁手を拍て曰く、之れ有る哉と。去年先生の堺より還るや、翁其病床を問ひ、談じて三十年前の事に及び、兩人相看て哄笑す。當時伝へて一佳話となせり。而して此一事以て、如何に先生が夙に思ひを文辭に勞せしかを知るに足るべき也。

然れども先生の文章大に進めるは、其歐洲より帰る後、故岡松鏡谷先生の塾に學べるの時に在るが如し、先生一日街頭を散策し古本店に於て和漢対訳の一冊子を見る。其訳文縦横自在にして絶て硬洪の処なし。先生深く之を喜び、嘆じて曰く、老手如此の人ある耶と。著者の名を検すれば岡松先生也。乃ち仏學塾に在て子弟を教育するの余暇を以て、贅を岡松先生に執り、學ぶ者數年なりしと云ふ。

岡松先生「訳常山紀談」に題するの文あり、中に曰く、「自余入都、有諸生請受業者、必先授以記實法、從文簡先生遺教也、中江子篤見之喜曰、循子之法、雖東西言語不同、未有不可寫以漢文者也、遂与二三子謀、取常山紀談、相伝訳之、余亦極力刪定、已成、彙為十卷、以便後進之士、相繼及門者取則焉。」先生實に岡松先生の教に従ふて、叙事の文を重んじたりき。常に曰く、文を學ぶ者須らく先づ叙事を學ぶ可し、能く叙事に長ぜば、往くとして可ならざる無けん」と。

「訳常山紀談」十卷、彪然たる大冊、實に當時先生及び同門諸君の刻苦勉強の迹を見るに足る者あり。後先生久しく之を公行するの意あり。曾て曰く、岡松先生は活刷を好まざりき、故に先師の遺志に従はんとせば、必ず木版に附せざる可らずと。而して其巨額の資を要するを以て貧にして果さず、常に以て憾とせり。去年先生死する前、其写本を篋底に取り、予を呼て曰く、是れ文学の至宝也、今汝に授く、我死後切に愛護して、之を見る猶ほ我を見るが如くせよと。此書現に予

謹^{つと}んで之を保管す、他日幸ひに公行して以て先生の志に酬^{むか}ゆるの機を得ば、予の願ひ足れり。

先生「一年有半」に於て、岡松先生の文を評して曰く「其材を取る極めて宏博にして、即ち三代秦漢より下明清に及び、旁ら稗官野史、方技の書に至る迄、時に応じ意に任せ、驅使して遺さず、而して其紙に著はるる所、所謂字々軒昂して、而かも且つ爰貼を失はず」と。此語直ちに移して以て夫子の文を評す可し。先生の學和漢洋を該ね、諸子百家窺はざるなく、手に任せて驅使するの所、人をして驚嘆せしむる者あり。

而して先生の文、独り其字々軒昂せるのみならず、飄逸奇突、常に一種の異彩を放つて、尋常に異なる者、予は其多く仏典語録の類に得る所ありしを信ず。先生平生禪を好み、多く交を方外に結び、且つ博く仏典語録を涉獵し、頗る悟入する有るが如く、碧巖集の如きは、其最も愛読する所なりき。人若し先生の新聞雜誌等に掲げし文字を玩味せば、必ず予の言の虚ならざるを知らん。

先生の翰を運らすや飛ぶが如く、多く改竄する所なし。其新聞雜誌に掲ぐる者の如きは、一氣呵成會て一回の復誦するなく、筆を投じて直ちに植字工の手に附せり。然れども、是れ決して其文に忠実ならざるが為めに非ず、又其苦辛を経ざるが為にも非ずして、唯だ其筆の健なるが為めに然るのみ。故に咄嗟の作と雖も、曾て文字の妥貼を失せる無し。但だ訳書及び碑銘其他の金石文字に至りては、數回の刪正を経ること有り、理學鈎玄の文の如きは、頗る推敲を費せりと云ふ。

先生漢文に於て、深く自ら任ずる所あり。曰く、邦人の漢文、支那人をして之を讀ましめば、恐らくは解する能はざる者多し。能く真正の漢文を作る者、岡松先生歿後幾人か有るやと。曾て自ら唐宋八大家文を取り、一々批点を附し評語を加ふ。曰く、予の批評や、山陽の謝選拾遺に優ること万々也と。此書今果して誰氏の許に在るやを知らず。而して先生作る所の漢文、僅かに竹井駒郎、宮城浩藏、植木校盛の諸君の墓碑に存するのみ。其他の文稿皆な散逸せるは、惜むに堪へたり